

収穫を終え、野菜集出荷施設の竣工をひかえる黄金崎農場の秋

年は、初めて70キロほど離れた隣県秋田県の小坂町の農家にも委託

9月の終わりごろになると、津軽は野も山も秋真っ盛りという感じになります。うねるような大地が広がる深浦本場から望む世界遺産の白神山

地も、山麓に展開する農地から見上げる岩木山も、その姿はより間近に際立って見えるようになりま

す。広大な農地で作業の合間に空を見上げると、青いキャンバスに描かれる薄雲の鮮やかさについて見とれます。

黄昏時、日本海のすぐ近くに位置する深浦の畑から、夕日が次第に赤みを増しながら水平線に落ちて行く様を見ていると、まさに海に沈み込む瞬間、太陽の「ジューッ」と焼ける音が聞こえるような錯覚に襲われます。

大地と自然の妙の素晴らしさに感動を覚える時間空間です。そして、こうした場所で佐々木君夫、竹内雅孝、それに私の3人で数え切れないほどの苦難に直面しながらも、5億円近い売上を確保するまでになった大型法人農業経営をつくりあげたことに、自分ながら拍手を送りたくなるときがあります。

とはいえ、まだまだいばらの道は続きません。時代の流れを見ながら、謙虚に、前向きに、元気よくこの農場を発展させたいものと思っております。

バレイシヨの品質は上々
ダイコンは最高の出来

8月中旬から収穫に入ったバレイシヨは、9月11日で掘り取りを終えました。大型トラクタで

けん引するポテトハーベスタを5台駆使して収穫するのですが、なにしろ80haの面積ですから1カ月もかかるのです。

バレイシヨを担当する佐々木が見るには、収量はまあまあで品質は上々とのこと。一般の市場価格は北海道の不作の影響もあって高めでしたが、農場は契約栽培主体のため、それより低めの固定価格です。したがって、このような年はユ一ザーから喜ばれることになり、1200tの加工用バレイシヨすべてが、9月の初めには加工会社に渡りました。

漬物用が主体のダイコンは10月に入って本格的な収穫を迎えますが、9月に収穫した「新八州」という品種は農場開設以来最高ともいえる出来栄です。適度に雨が降り、日照も多かったせいでしょうが、今年は自慢できる年となりそうです。

また、昨年までは、深浦本場だけで加工（塩蔵）処理していた関係で、ここから約70キロ離れた岩木山麓で生産したダイコンの運搬には難儀していました。

その岩木山麓の畑に近いところに、使っていない漬物施設があったので、これを譲り受け、改造して加工処理できるようにしました。これにより、岩木山麓で生産するダイコンの運搬はグリーンと楽になりました。

ダイコンは農家へ25haほど生産委託もしています。それも深浦本場から150キロも離れた場所があるなど遠隔地ばかりですが、この距離をモノともせずに日帰りで生育調査などでかけています。時間的なロスはもつたいたいのですが、ダイコンづくりの仲間となった委託農家の真剣な顔を見ると、そんなことは言っていられません。今

しましたが、その出来栄も見事です。この小坂町の生育状況を確認するために高速道路を使って移動しているほどです。

かなりダイナミックなダイコン生産ネットワークですが、交通事情の改善によりこうした広域的な生産方式は、我々の農場以外でも今後増えていく予感がします。

ダイコン掘りは雪がちらつき始める11月20日頃まで続きますが、これまでの天候、生育状況から見て、主力となる「秋まさり2号」「T734」はその品種特性を最大限に発揮して、我々の期待に応えてくれると確信しています。

9月に入りダイコンの市場価格はくずれていますが、我々は契約栽培農家ですので、市場価格に振り回されずに出荷できる強みがあります。

ところで、現在、ダイコン生産でネックとなっているのは、収穫に多大の労力がかかることです。最盛期になると20人以上の人手で掘り取るようになるのですが、これを何とかして機械で出来ないかと、切望しております。

ダイコン収穫機械は数メーカーで開発し、農場でも試験してもらっていますが、いずれももう一歩です。特に、ダイコンの豊富な葉の処理が難点となっているのです。しかし、優秀な我が国の農機メーカーのことですから、早いうちに実用化のメドをつけてくれると信じています。

生育が良好な作物が多い中で、45haある大豆は一部の畑で生育が芳しくありません。青森県の奨励品種は良い種が手に入らないため、北海道奨励品種の「トヨマサリ」を全面導入しているのですが、特に土壌条件のやや劣る場所で生育量を確保できないようです。品種、栽培管理も含めて一



上：ポテトハーベスタによるバレイシヨの収穫
下：掘り取ったダイコンの運搬。今年のダイコンは最高の出来

層の勉強が必要です。

幸い、東北農政局で大豆の振興を協議する場を設けることになり、当農場もその検討委員となりましたので、ここで大いに提言しながら、先進的な事例も学ぶことにしています。

なにしろ、大豆の自給率は5%を切り、それいながら国産大豆に対する需要が強いという事情があります。好適作物をなかなか見いだせない水田転作の問題もかみ合わせながら、大豆生産をどうするのか、農政局での多方面からの議論が待たれます。

竹内が担当し、バレイシヨ、ダイコンとともに農場の核となる小麦は、好天に恵まれたため例年になく早い9月27日にほぼ種時きを終えました。グレインドリルという大型機械を使うのですが、竹内と助手一人で今年は過去最大となる150ha近い面積に植え付けました。昨年は種時き時が雨にたたられるなどして、その後の生育不良につながっただけに、竹内は念入りに深耕、施肥などを行っており、来年の収穫が楽しみです。

佐々木が青森県農業法人協議会の初代会長に

我々は昭和51年に、農事組合法人としてこの農場をスタートさせました。そもそも農業経営の法人化は昭和30年代前半、徳島県や島根県などで税務対策の一環として動き始めたものです。その後、農協法に「農事組合法人制度」が位置づけられて法人組織が増えたのですが、我々が視察したところは、補助事業受け入れのためだけだったり、共同から個別化したりしているなど、本来の姿とは程遠いものも多くありました。そのため、黄金崎農場は、このような実態を反面教師にして「完全な協業にし、法人から給料をもらうシステムをやりとげる」という意気込みで発足したのです。

平成4年、農林水産省は「新しい食料・農業・農村政策の方向」を打ち出し、時代の流れを踏まえた法人経営体の育成策を強めることになりました。それを受けて農業者の間に、法人化に対する関心が強まり、青森県では、去る8月22日、約30人の参画で青森県農業法人協議会が設立されました。全国では23番目の県単位での設立です。この協議会の初代会長に我が農場の代表佐々木君夫が選ばれました。喜ばしいことであると同時に、責任を感じます。

協議会では、法人の経営強化や農業のイメージアップなどの活動を展開することになっています。そのトップに位置する法人として、模範とはいえないまでも、見本とはなれるような経営を展開しなければと肝に銘じているところです。

ただ、これまで多くの法人が活動を停止していることでもわかるように、複数戸から成る法人は、経営を安定させながら存続させていくのは容易ではないのです。

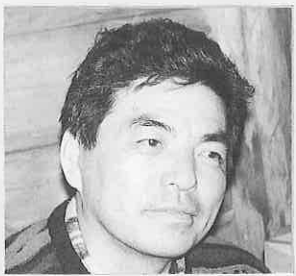
我が農場も、この数年、大きな投資をするだ

けに経営的にはかなりの厳しさがあります。例えば、約86haの土地を10a1万円の小作料で借り、5年後にはその金額も算入して購入する農地保有合理化事業を使っているのですが、単位面積収入の少ない土地利用型作物を柱とする我々の経営にとつては、10a1万円の負担は大きいものがあります（86haでは860万円にもなる）。こうした苦しさを仲間とともに乗り越えなければならぬのですから、言うは易く行なうは難しです。

5月30日に起工した野菜集出荷施設の建設工事が順調に進み、施設の輪郭がはっきりとわかるようになりました。完成は10月20日の予定です。この工事で嬉しいことがありました。井戸を掘ったところ、深さ200mで1分間に1000ℓの水が自噴したのです。16℃の実においしい水で岩山の伏流水かもしれません。16℃はダイコンやナガイモの洗浄と鮮度維持には最適の水温です。

嬉しい出来事も加わった、この集出荷施設の竣工式は、10月下旬ですが、今年最大の行事になりそうです。こんな明るいイベントを通して農場に働く人達が元氣良く仕事をしてもらえればと、願いを込めています。

深浦の農場事務所南東約5キロに位置する白神山地が秋の気配を増しています。四季が確実に繰り返すように、苦しさの後には間違いなく発展がある、そんな大型経営に思いをはせる黄金崎農場の秋です。



きむら・しんいち/1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立